犯罪者／犠牲者である謎の女：
Isabel Vane / Vine in *East Lynne*

松本三枝子

序

1861年に出版された*East Lynne*は10年間で24版を重ね、1895年には40万部に、1900年には50万部に達した大ベストセラーである(Maunder 17－20)。それゆえ『イースト・リン』が19世紀のイギリス小説の中で最も売れた小説のひとつであることは間違いない。母性のメロドラマという内容から1860年代から舞台で上演され、1902年には映画化もされている。ごく最近の映画*Mrs. Doubtfire*(1993)は、Robin Williamsが演ずる離婚した夫が子供たちに会うため、女装して家庭教師として元の家庭に戻って来るというまさに現代版の『イースト・リン』である。

このように根強い人気を誇る作品であるが、*New Monthly Magazine*に連載後3巻本小説として出版しようとしたときには文法上の訂正やプロットの修正まで求められて作者のEllen Wood(1814－87)は大変な苦労をしている。この小説が彼女のまだ2作目の小説であったことから、表現上の未熟さは認めて訂正したが、プロットの変更は受け入れなかった。変更していればその後の彼女の成功はなかったかもしれない。自らのプロットへの信頼は小説家としての当初から彼女の根源にあった自信でもあった。

Wilkie Collinsの*The Woman in White*や、Mary Elizabeth Braddonの*Lady Audley's Secret*に比肩する煽情小説である『イースト・リン』は、センチメンタルで旧弊な母性のメロドラマと受け取られがちであるが、この小説の意味と構造はそれほど単純ではない。極めて長い小説ではあるが、詳細に分析することで『イースト・リン』の魅力と問題性を明らかにしたい。

I　女性化したネットワーク：窃視症とゴシップと夢

『イースト・リン』は、Isabel Vane、Archibald Carlyle、Barbara Hare の３人の登場人物を中心にふたつの物語が展開する小説である。メイン・プロットはイザベルが貴族の娘から裕福な弁護士の妻になり、放蕩者 Francis Levison に誘惑され家庭と子供を捨てるが、後悔し母性に目覚め家庭教師として子供と夫の元に舞い戻るというものだ。サブ・プロットはバーバラの弟の Richard が殺人の濡れ衣を着せられる冤罪事件である。その真犯人はフランシス・レヴィソンで、このふたつのプロットは緊密に構成されているので、ここではイザベル、カーライル、バーバラの３人の関係に焦点を絞り論を進めていくことにする。

イザベルは伯爵の娘であるが、父親が亡くなった時彼女には全く資産が遺されておらず、爵位を継いだ親戚の扶養者となり、惨めな生活を送ることになる。彼女の美貌はこの小説の中で何度も言及されるもので、「天使のような美しさ」(*EL* 49)、「その美しさは居間でセンセーションを引き起こすほどのもの」(*EL* 50)と評されている。その美しさからもっと良い結婚もできたであろうが、彼女の境遇に同情する弁護士のアーチボルド・カーライルと結婚し、彼女が父親と共に住んでいた旧宅であるイースト・リンに女主人として戻ることになる。

しかし彼の求婚を受け入れるに当たり、彼女は彼を愛してはいないことをはっきりと伝えている(*EL* 168)。さらに読者にはイザベルが既にこの時レヴィソンに恋心を抱いていて、彼からの求婚があればカーライルではなくレヴィソンと結婚したいと思っている彼女の心中が語られている。レヴィソンを思い出して胸の高鳴りを覚えるイザベルを描き(*EL* 109)、密かに愛するレヴィソンから、カーライルとの結婚を祝福されて惨めな思いを噛み締めるイザベルをさらに読者の前に示している(*EL* 167)。実際に彼女がカーライルからの求婚を受諾するのはこの直後のことである。

> "I ought to tell you, I must tell you," she began again, in the midst of *hysterical tears*. "Though I have said 'Yes,' to your proposal, I do not—yet—It has come upon me by surprise," she stammered. "I like you very much; I esteem you and respect you: but I do not yet love you." (*EL* 168, italics added)

イザベルが興奮して涙を流しているのはなぜなのだろうか。レヴィソンに冷たくあしらわれたからか、愛してはいないカーライルとの結婚を選択しなければならなかった自らの境遇ゆえの口惜しさなのか。注目すべきは彼女がそのような自らの気持ちをはっきりとカーライルに伝えていることだ。伯爵の娘としての誇りもあるだろうが、彼女が自らの感情を抑制せずに語っていることは重要である。なぜならここで彼女が語っているのは自らの感情であり、欲望であるからだ。女性が自らの感情、さらには欲望を率直に表現すること、そしてそれを読者に伝えることが、この小説では自然なものと見なされている。

『イースト・リン』にはこのようなイザベルだけではなく、さらに自分の感情を率直に男性に表現する女性が登場している。それがバーバラ・ヘアである。彼女はカーライルと幼馴染みであり、彼を愛し結婚を願っていたのだが、彼女のそのような気持ちには全く気付かずに、彼はイザベルとの結婚を決めてしまう。「バーバラ・ヘアの暴露」と題された第16章で、自らの感情を抑えきれずに苦悶する彼女が実に赤裸々に描かれている。

> On it came, passion, temper, wrongs, and nervousness, all boiling over together. She was in strong hysterics. Mr Carlyle half carried, half dragged her to the second stile, and placed her against it, his arm supporting her .... Barbara struggled with her emotion, struggled bravely, and the sobs and hysterical symptoms subsided ; not the excitement or the passion. (*EL* 212)

イザベルとカーライルの結婚により突然未来の夫の存在を失ったバーバラの動揺は尋常なものではない。ヴィクトリア朝時代の女らしさの規範からは考えられないほどの激しさでバーバラは自らの感情をカーライルにぶつけるのである。しかし冷静なカーライルはバーバラとの関係はあくまでも兄と妹のような感情、あるいは友情を認めるにとどめている。理性的なカーライルに対して自らの感情に翻弄されるバーバラを、語り手は否定的には描いてはいない。ウエスト・リンの隣人達は使用人に至るまで、彼女の苦境を察している。例えばカーライルの結婚の知らせを初めて知った時のバーバラの取り乱した姿が、使用人の Wilson により次のように語られている。

"A few moments, and I heard a noise; it was a sort of wail, or groan, and I opened the door softly, fearing she might be fainting. Joyce, if my heart never ached for anybody before, it ached then. She was lying on the floor, her hands writhed together, and her poor face all white, like one in mortal agony. I'd have given a quarter's wages to be able to say a word of comfort to her; but I didn't dare interfere with such sorrow as that. I came out again and shut the door without her seeing me."

(*EL* 227)

もちろんバーバラは自分の感情に溺れる姿を使用人に覗き見られていることに気付いてはいない。しかしそのような嫉妬に自らを失う彼女の姿を容赦なく読者の前にさらすことに語り手は躊躇していないし、そのような場面に遭遇したウィルソンはバーバラに対して同情的である。感情に、ここでは嫉妬であるが、翻弄される女性をあるがままに描くことに作者は何の抵抗もない。むしろこの場面では使用人の目を通して、読者は女性の私室を覗き見る快感とスリルを味わうことになる。使用人という装置を介して読者は良心の呵責なくバーバラの内面にまで入り込むことができる。

しかし、そのような手段を用いずに新婚夫婦であるカーライルとイザベルの睦み合う姿が公然と描かれる場面もあり、遭遇したバーバラは低い呻き声をあげている。つまりこの小説ではそのような夫婦の愛情生活が当然のものとして描かれている。さらにいえばそのような場面が頻出しているとも感じられる。とりわけバーバラに対してあれほど冷静であったカーライルが妻への愛に浸り切る情景(*EL* 208−09)は趣味が良いとは言い兼ねるが、姉の Cornelia を介して描かれることで、ユーモアや時には滑稽味さえも帯びる場面となり、均衡のとれたものとなるように配慮されてはいる。

しかし家庭生活、夫婦生活などの私的空間を守るプライヴァシーの意識は希薄である。使用人のウィルソンがバーバラの私室をこっそり覗き込んだように、コーネリアは夕食後に憩う弟夫婦の部屋に入り込んで二人の様子を垣間見ている。使用人階級のみではなく、本来ならばそのような行為は憚られるような中流階級の人々も同様の行為を行っている。夫とバーバラが密かに相談をしている様子をイザベルは二階の窓からじっと監視して

いる。さらにバーバラのカーライルへの愛情について、イザベルが知るのはウィルソンのゴシップを通してであり、彼女はそれを無防備にも信じてしまう。窃視症やゴシップはこの小説全体を覆っている重要な特徴である。それは階級を問わずに共有されている。

この小説の後半で、鉄道事故により容貌が激変してしまったイザベルが家庭教師として過去を隠蔽して生活し、偶然に出会ったAfyにイースト・リンのカーライル家の近況を尋ねる場面がある。使用人であるジョイスの異母姉妹であるアフィはイザベルの出奔と彼女の鉄道事故死の訃報、そしてバーバラとカーライルとの再婚などまさにゴシップの宝庫である。つまりイザベルは自分のかつての家族である夫や子供の近況を余すことなくアフィから聞き出し、自らの生存を隠して家庭教師として旧宅へ舞い戻ることを決意する。ここではアフィの窃視症やゴシップは重要な信ずべき唯一の情報源として機能している。彼女は言わば『イースト・リン・ジャーナル』と化している。

それはフランシス・レヴィソンがカーライルとイザベルの離婚を隠していたのと対照的である。カーライルは妻の出奔による彼女との離婚を申し立てる。一方、これが認められれば、イザベルはレヴィソンと正式に結婚できる。しかし彼女は自分に関することでありながら、この情報を全く得ることができず、結婚する気のないレヴィソンは離婚の成立を彼女に隠蔽している。このことは女性が自らの利害に直接関係することでありながらも、その情報から隔てられ疎外されていることをよく物語っている。このように男性により情報操作される状況の中で、窃視症とゴシップは女性が情報収集をする場合の重要な手段でありネットワークなのである。『イースト・リン』において窃視症とゴシップが否定的に表現されたり、批判の対象とされることがないのは、男性とは異なる情報収集手段とそのネットワークの意味と機能を認知していることになる。

Ann Cvetkovichが*Mixed Feelings*の中で煽情小説を次のように分析していることは興味深い。

> Borrowing from the theatrical melodrama, the sensation novel achieved its effects through spectacle. Sensational events often turn on the rendering visible of what remains hidden or mysterious, and their affecting power arises from the satisfaction or thrill

of seeing. Sensationalism's use of the visual, of the relation between the hidden and the seen, contributes to its capacity to make the abstract seem concrete. (24)

隠蔽されていたり神秘化されていたりして通常は見えないものを見えるようにすること、そのような非日常のものを見るという行為からうまれるスリルと満足を煽情小説は読者に提供することができる。このようにツヴェトコヴィッチはElaine Showalterらのフェミニスト批評とは異なる視点から、煽情小説の意味を分析している。『イースト・リン』における窃視症とゴシップはまさにそのような煽情主義の手法のひとつとして、日常には語られず目にすることができないものを語り、見つめることを可能にする装置である。それはまた女性化した情報収集方法であり、ネットワークでもある。同様の装置としてこの小説で機能しているのが、ヘア夫人の夢である。

彼女は暴力的といってよい家父長である判事を夫に持ち、家族は誰も彼に逆らうことができない。息子のリチャードが殺人犯として逃亡している状況で、ヘア夫人は過度の不安と心労から病気勝ちである。その彼女が突然夢を見る。その夢は、Bethelが Hallijohn殺しに関係していることを予言するものであった(*EL* 68−69)。彼女は娘のバーバラに夢の話をするが、バーバラは本気にはしていない。母親がハリジョン殺しの夢を見たのは、常にリチャードのことを考えているから、さらにベセルについては彼が昨晩門の前を通ったのを母親が見たためとバーバラは冷静な分析をしている。

しかしテキストはバーバラの分析を裏切っている。なぜならこの直後にリチャードが母親を密かに来訪し、さらに物語の結末ではベセルは殺人の共犯者であることが判明するからである。ヘア夫人の二度目の夢はハリジョン殺しの真犯人がウエスト・リンの彼らの家を訪れることを告げるものであった(*EL* 280−83)。この夢に対するバーバラの反応は複雑である。

"You know, mamma, I do not believe in dreams," was Barbara's answer. "I think when people say, 'This dream is a sign of such and such a thing,' it is the greatest absurdity in the world. *I wish you could remember what the man was like in your*

dream." (*EL* 282−83, italics added)

Andrew Maunder はブロードヴュ版の『イースト・リン』で19世紀、特に1850年代から夢に関する関心が高まっていたことに言及している(282)。しかしここで重要なのは、バーバラが夢の予言性について信じないと言いながら、母親に夢に現れたその真犯人について尋ねているところである。母親は夢についての記憶が曖昧で背が高い男としか思い出せない。

しかしテキストはここでも再び夢がある意味で真実を告げていることを示している。なぜならフランシス・レヴィソンがイースト・リンに滞在していたからだ。彼がハリジョン殺しの真犯人であることは、小説の結末にならないと読者には分からないのだが、テキストは夢が予言として機能していることを支持している。これは作者が同時代読者の夢への関心を利用したものと解釈することも可能である。しかしむしろ、家父長的な夫の存在に気兼ねしながら、息子を溺愛する母親の存在を矮小化せず軽視せずに、テキストは構成されているということができる。ヘア夫人は弱い母親ではあるが、愚かな母親として描かれてはいない。なによりもこの小説においては子供を愛する母親こそが焦点なのであり、その意味ではヘア夫人はイザベルと共鳴する存在なのである。ヘア夫人は家庭教師としてイースト・リンで子供達の世話をするイザベル・ヴァンに、レヴィソンに誘惑されたイザベル・ヴェインの心情を理解し語っている。

> "No woman ever took that step yet, without its entailing on her the direst wretchedness .... And Lady Isabel was of a nature to feel remorse, to meet it half way. Refined, modest, with every feeling of an English gentlewoman, she was the very last one would have expected to act so. It was as if she had gone away in a dream .... That terrible mental wretchedness and remorse did over-take her, I know." (*EL* 488)

これはイザベル・ヴェインに対して極めて同情的な内容である。そしてこの発言が物語の後半で、読者の感情をリードしていくことになる。ヘア夫人はモラルや規範を侵犯した者に対して甘いのではなく、悔悛している者に寛大な慈悲深い母親として機能している。それではそのようなヘア夫人

に理解を示し、彼女の夫であるヘア判事の意向に反して行動するカーライルとはどのような人物として位置付けられているのだろうか。

Ⅱ　専門職エリートであるカーライル

19世紀のイギリス小説に登場する専門職の筆頭はなんといっても医者であろうが、弁護士も同様に重要な職業として登場している。彼らの登場は中産階級が重要な社会的地位を占めていくことと平行していると考えることができる。前章で言及した1860年代に人気を博した主要な煽情小説の中で、『オードリー卿夫人の秘密』と『イースト・リン』の二作で弁護士が重要な役割を与えられていることは注目に値するが、その意味は必ずしも同じではない。この章では弁護士のカーライルを『オードリー卿夫人の秘密』に登場するロバート・オードリーと比較しながら分析を進めていきたい。

この二人の弁護士を比較対照して気が付くことは、ロバートが弁護士の資格を持ちながらも実質的にはその職業を全く行っていないこと、つまり彼は父からの遺産の400ポンドで遊民的な生活をこれまで過ごしてきているのに、カーライルの成功は彼自身の弁護士としての実績によることである。つまりロバートが遺産により生活を支えるという金額は少ないものの系譜に依存した貴族的な資質を色濃く持っているのに、カーライルは実業という極めて19世紀的なビジネスの分野での成功者として位置付けられている。

カーライルやバーバラ・ヘアが裕福な中産階級に位置付けられる一方で、イザベルやフランシス・レヴィソンは貧しくはあるが貴族階級に属している。カーライルとイザベルの結婚が身分違いのものであることが言及されていることは、この階級と富の関係のねじれをよく物語っている。なぜなら弁護士のカーライルが貴族の娘であるイザベルを手に入れることができたのは、彼の蓄積した富によるものであるからだ。このように没落あるいは破綻した貴族の娘と富裕な中産階級との結婚は、イギリス小説ではありふれたものであるが、『イースト・リン』では結局この結婚が破綻することになる。つまり旧来の方法での階級の上昇はここでは失敗に帰することになる。

さらに重要なのが、カーライルとロバートが各々の小説で担っている役割の違いである。『オードリー卿夫人の秘密』において、ロバートが追求し

ていくのは、旧友のジョージ・トルボイズの失踪の真相であるように見えながら、実はオードリー卿夫人の秘密である。つまりロバートの追求の対象が、ジョージの妻でもあったヘレン・トルボイズの虚偽と重婚の人生であることは、ロバートがそのような家父長制の規範からの逸脱者である女性を、追求する立場に位置付けられていることを意味している。ロバートは家父長制の側の人物として極めて残酷な守護神として小説の中で変貌していくことになる[1]。つまり彼は小説の冒頭では遊民的で家父長制のアウトサイダーと位置付けられ、その意味では女性の側であり、オードリー卿夫人の側に極めて近い人物として描かれながら、結局は彼女の虚偽を暴き、ついには彼女をイギリスから排除し、異国の精神病院に幽閉するという家父長制を守る役割を自ら進んで実行することになっている。それではカーライルはどのような役割を担っているのだろうか。

彼が関係する事件はバーバラ・ヘアの弟であるリチャードの冤罪事件である。アフィ・ハリジョンに恋するリチャードは彼女の家を度々訪れるのだが、 恋敵である Thorn のハリジョン殺しの濡れ衣を着せられてしまう。この事件は前述したように『イースト・リン』の重要なサブ・プロットであるが、読者にはほとんど最後まで真相が明らかにはならない。読者に与えられる情報は、殺人犯として逃亡しているリチャードの断片的な証言と、ヘア夫人の予言的な夢である。ここで重要なことは、なぜ逃亡しているリチャードが母親に会いに来るために身を隠したり、自らの家ではなくカーライル家に現れたりするのかということである。それには彼の父親であるヘア判事が息子の犯罪を信じ息子の死刑の執行に積極的であることが背景にある。この無慈悲で家父長的な父親の存在が、ヘア夫人を始めバーバラら女家族の心痛の種となっている。判事の父親が君臨する家庭にはたとえ息子であろうとも、被疑者のリチャードは姿を現わすことも弁明をする機会も与えられることはない。

このようなヘア家において代理の父親としてヘア夫人やバーバラの相談相手となり、リチャードの逃亡資金まで用立ててやるのが、カーライルである。このような役割を担うカーライルを Lyn Pykett は次のように分析している。

> Carlyle is presented at various stages of the narrative as a failed patriarch in his own household. His gender identity is fur-

> ther problematised . . . by his secret alliance with women (Barbara Hare and her mother) to frustrate the wishes of the domestic tyrant, Justice Hare . . . . [T]hrough his involvement with Barbara and Mrs Hare, he himself becomes a kind of super-woman or super-mother. On their behalf he defends the affective family which persists (or subsists) within the stern patriarchal family of Justice Hare[2].

リン・ピケットはまずカーライルが自分の家庭での異母姉であるコーネリアを制御できない家父長として見ている。特に結婚後もこの姉がイースト・リンに同居することを拒否できなかったことが、イザベルの不幸の大きな原因であったことに彼は全く気付いていなかった。姉でありながらも母親のような存在であり、男勝りのコーネリアにより、カーライルの家庭は結婚後も牛耳られていくことになっている。

しかし彼はそのような過ちをバーバラとの再婚後は繰り返していない。再婚後の彼はコーネリアの新婚家庭への介入をよく退け、国会議員への立候補でも彼女の反対に耳を貸してはいない。それゆえ物語全体を通してみた場合、彼は必ずしも失敗した家父長ということにはならない。むしろ失敗に学んだ家父長であるというべきである。カーライルのこの小説における役割を考える時に、リン・ピケットの後半の分析が、むしろ重要である。彼が「スーパー・ウーマン、スーパー・マザー」として機能しているという点である。ここにカーライルのジェンダー・アイデンティティの不安があるということになるのだろうが、その問題を明らかにするためにも、小説全体を通してみた場合、彼のハリジョン殺人事件への関与はどのような意味を持つことになっているのかをまずは分析したい。

カーライルの殺人事件への関与は、当初アフィの父親殺しの真犯人を探すことにあった。リチャードによれば、それはアフィのもうひとりの恋人であるソーンという人物になるのだが、リチャード以外は誰もその人物を見ていないし、アフィ自身がリチャードを真犯人としている。孤立無援のリチャードの証言を信じているのは、ヘア夫人とバーバラ、そしてカーライルのみである。しかし紆余曲折の後にソーンが偽名であり、実は彼がフランシス・レヴィソンであることが物語後半で明らかになる。つまりレヴィソンが侵犯し破綻させていた家族は、カーライル自身の家庭のみなら

ずヘア家でもあったのだ。それゆえカーライルが追求し探していたソーンなる人物はハリジョン殺しの殺人犯であるのみならず、イザベルを誘惑し、カーライルの家庭を破綻させた放蕩者であった。カーライルはリチャードの無実を証明するために尽力しながら、結局自らの妻を寝取った男を探し求めて復讐しようとしたことになる。

しかし興味深いのはテキストは明らかにこのようにカーライルのレヴィソンへの復讐劇と読んでいけるのに、カーライル自身が物語の結末ではそのような読みを拒否することである。

> "For the crime penetrated upon Hallijohn, I would pursue him to the scaffold. For my own wrong, no .... I leave him to a higher retribution : to One who says 'Vengeance is mine.' I believe him to be guilty of the murder : but if lifting my finger would send him to his disgraceful death, I would cut off my hand, rather than lift it." (*EL* 563)

ここでカーライルが演じている役割は、"a Christian gentleman" である。Thomas Hughes が *Tom Brown's Schooldays* において理想の男子の生き方としたのが正にこの "a Christian gentleman" であった。それは放蕩と浪費により凋落する貴族階級に対して、キリスト教信仰と道徳感を重視する中産階級的な紳士の価値観である。

この決意により、カーライルはフランシス・レヴィソンはもとよりイザベルも包含する貴族的な価値観と別離し、自らの属する中産階級に心身共に帰属することを表明したことになる。これに妻のバーバラが従属することに依り、近代的な夫婦の成立が確立することになる。それは装飾的な妻であった貴族の娘イザベルと決別し、家父長的な父に反抗する娘であるバーバラと新しい家庭を築くことを意味している。同時に選挙で貴族のレヴィソンではなくカーライルが国会議員となることで、カーライルが果たしている役割は、貴族階級から中産階級への権力の移行である。しかし同時に見落とせないのは、カーライルとバーバラが築く新しい家庭が、夫婦を中核としていることである。それはイザベルと子供達とのような濃密な母子関係は退けられた家庭である。

しかしここで再びテキストはこの新しい家庭観を裏切るように進んでい

く。なぜなら物語の中心はカーライルとバーバラの新しい家庭ではなく、イザベルと子供達の旧来の濃密な母子のメロドラマであるからだ。

Ⅲ　犠牲者としてのイザベル

『イースト・リン』後半で展開されるイザベルの苦悩、子供を捨て家庭を捨てた母親の後悔と苦悩が連綿と描写される語りは、現代の読者には支持されず過剰なものとする批評家もいる。

> Although the modern reader may find *East Lynne's* glorification of female suffering to be masochistic and sentimental, the popularity of the novel (especially with women) suggests that readers found Wood's description of Isabel Vane's misery satisfying and interesting and her fate acceptable[3].

しかし濃密な母子関係の持つ充足感と閉塞感は、時代を越えて現在の母親達も共有できるものとも考えられる。リン・ピケットはこれを母子関係が生み出す本質的な心理として次のように分析している。

> In its representation of the masochism of the maternal melodrama, *East Lynne* comprehends (in the sense of both embracing and understanding) women's desire for the child, and their anxieties about the separation from the child—anxieties which according to Lacanian psychoanalysis replicate their own feelings of loss and separation from the mother[4].

しかし忘れてならないのは、『イースト・リン』の後半部分を支配している母親は、バーバラではなくイザベルであることだ。つまり母親としてあるべき規範から逸脱した母親、堕ちた女であるという事実である。なぜ読者は彼女に自らの母親としての体験を同化することができるのであろうか。そこには次の一節から理解できる意図的な読み替えが行われているからである。

> "Did she go?" cried Lady Isabel, full of emotion, and possessing a very faint idea of what she was saying.
> "She was kidnapped," whispered Lucy.
> "Kidnapped!" was the surprised answer.
> "Yes; or she would not have gone. There was a wicked man on a visit to papa, and he stole her." (*EL* 474)

この二人の会話は、家庭教師として変装して旧宅に戻ったイザベルと実の娘であるルーシーが、母親とレヴィソンとの出奔に言及している場面である。幼いルーシーは、どこまで母親の事件を理解できているのだろうか。イザベルは誘拐されたことになっている。それゆえ彼女は犯罪者ではなく犠牲者なのだ。

子供騙しの説明と一笑に付すことも可能である。しかしこれ以降イザベルの出奔を公然と非難するよりも、むしろ彼女の現在の改悛と苦悩に焦点が絞られていくことは間違いない。家庭の天使であることを求められ、自己犠牲を強いられる家庭生活を捨てようとする妻や、退屈な結婚生活から逃避したいという誘惑に負けてしまいそうな母親達に、語り手は病床にある実の息子や娘に名乗ることができないイザベルの苦悩を描くことで、規範や道徳から逸脱しようとする妻や母達に警告はしている(*EL* 334－35, 349)。しかし家庭に閉じ込められた女達の欲望や自由への渇望を決して否定しているわけではない。

Ann Cvetkovich は Elaine Showalter に代表されるようなフェミニスト批評の研究者が、煽情小説を女性の感情を語ることにより、女性の自由や解放に貢献したと評価し過ぎていると分析している(39－40)。『イースト・リン』を読むことにより、女性読者は母として妻としての孤立感や閉塞感をイザベルの経験と共鳴することができるのだが、私的領域に閉じ込められてしまった女性が抱える問題にこの小説が解決の方途を提案しているわけではない。Andrew Maunder が述べているように、この小説は女性が家庭の外にも欲望を持っていることを語っているという指摘(33)が、むしろ重要な批評といえるのではないだろうか。モーンダーは『イースト・リン』は家父長制の側から女性の問題を扱っていると分析しているが、女性が夫以外の男性に欲望を抱くことを、これほど公然と認めた小説がなぜミューディーズ等の貸本屋のリストに残ることができたのか、考察に値す

る。

上記に引用したルーシーの言葉からも推察できるように、イザベルの出奔は間違いなく彼女の罪なのだが、彼女は犯罪者というよりも悔悛し苦悩する犠牲者として語られ、描かれていくのである。

「死の部屋」と題された第58章で、瀕死の William とイザベルの会話は、母親と名乗ることのできない彼女と息子との哀切極まるやり取りであり、確かにヴィクトリア朝時代の女性読者の憐憫の情を掻き立てるものとなっている。死に敏感になっている彼は John Martin の有名な3部作を父親や、姉と見に行った折のこと(第48章)を思い出している。ここで焦点となっているのは、天国に母親のイザベルもいるかどうかである。

> "But how we be sure that she will be there?" debated William, after a pause of thought ....
>
> "Oh, William," sobbed the unhappy lady, "her whole life, after she left you, was one long scene of repentance, of seeking forgiveness. Her repentance, her sorrow was greater than she could bear .... Her heart broke in it; yearning after you and your father." (*EL* 642)

第48章では姉のルーシーが父親に同じことを尋ねており、父親はそれに答えなかったのだが、上記の場面ではイザベル自身がウィリアムの問に答えている。つまり彼女は悔い改め、許しを求めることで天国に召されることができるというものだ。同時代の読者は彼女の願望を受け入れることができたからこそ、この小説は大衆性を獲得できたのであろう。

この解釈は『イースト・リン』結末でのカーライルとイザベルの和解にも繋がっていくことになり、イザベルは心の病により亡くなりはするが、彼は彼女に許しを与えている。バーバラとの結婚後に、イザベルとバーバラの関係の逆転が何度も言及されている。物語後半で、夫婦の関係からはじき出されたのはイザベルであるからだ。しかし同時にウィリアムとイザベルの濃密な母子関係が展開されていき、物語が結末に近付くにつれて、この母子関係は夫婦関係の代理ともなっていくと分析する研究者もいる。

> William's illness makes him as helpless as an infant, and in de-

> voting her total attention to him Isabel can recreate the earliest moments of the intimacy between mother and child. That it is her son and not her daughter that figures so prominently in the narrative suggests that he is as much as a substitute for her husband as a figure for her own identification[5].

ウィリアムとイザベルの関係は、イザベルとカーライルの関係を投影するものとなり、彼女の心理の中でこれらの関係が重ね合わされる。そして同時に夭折するウィリアムと失意のうちに若死するイザベルは読者に二重写しになって表現されることになる。

それが可能なのは、彼女の出奔の原因が彼女の欲望にあることが十分に語られていないためである。夫がバーバラの相談に余りに熱心であったために、イザベルは惨めな気持ちになり、レヴィソンの誘惑にのってしまう。しかし前述したように、彼女はもともとカーライルではなくレヴィソンを愛していたのだ。出奔後は子供ができ彼と結婚さえしようとしている。このようなイザベルの大胆な悪女の面は物語が進行するにつれて読者の記憶から消失されていく。一度は子供を捨てた母親が、旧宅に舞い戻り打って変わって病児を溺愛する状況は、物語の一貫性から見れば問題があるのだが、圧倒的な母性のメロドラマの前にそれらは不問になってしまう。むしろイザベルは自らを名乗り出ることのできない哀れな母として、抑圧状況にある犠牲者のように描かれ、読者に受け入れられていくことになる。

結　び

以上述べてきたように『イースト・リン』は本質的に女性的価値観が重視された小説である。それは女性の感情や欲望の描写を認知し、一貫して女性の側から語られた小説であるということができる。窃視症やゴシップ、夢という通常は軽視されたり無視されるような情報ネットワークが公然と正当に小説の中で機能し扱われている。男性中心の社会において女性達はこのようなもうひとつの手段を駆使することで、公的ネットワークではない彼女達自身の私的ネットワークをつくっていくことになる。特にヘア夫人の見る夢は息子を溺愛する愚かな母親の夢ではなく、隠蔽された放蕩者の犯罪を予言する重要な意味を持っていた。なぜならリチャードに濡れ衣

を着せたレヴィソンはイザベルの誘惑者でもあったからだ。それゆえカーライルは冤罪事件の犯人を探し求めていて、実は妻を奪い、家庭を崩壊させた男を追求していたことになる。それゆえ彼は『オードリー卿夫人の秘密』に登場するロバート・オードリーが自らの過去を隠蔽するオードリー卿夫人のアイデンティティを追求し暴露したのとは対照的に、ヘア家とカーライル家を破綻させた犯罪者の男の真の姿を暴露したことになる。

それゆえ『イースト・リン』においてはフランシス・レヴィソンこそが悪漢なのであり、犯罪者なのである。彼に誘惑され子供や家庭を捨てたイザベルは、彼に捨てられ、鉄道事故にあい、過去を悔悛することにより、むしろ犠牲者として扱われていく。特に家庭教師として自分の息子であるウィリアムを看病し、彼の死を看取る過程は、母であることを告げることができない苦悩する母親として描かれている。その姿に読者が自らの姿を重ねることができたのは、濃密な母子関係が持つ充足感と閉塞感、そして孤立感を読者がイザベルと共有することができたからである。母子関係を賛美していながら、それが持つ否定的な側面を前景化することにより、『イースト・リン』は現在でも分析するに値する小説として生き残っている。

注

1 拙論「*Lady Audley's Secret* における二重人格を再考する」においてロバート・オードリーの変貌については分析している。

2 Lyn Pykett, *The 'Improper' Feminine*, 120.

3 Andrew Maunder (ed.), *East Lynne*, 28.

4 Pykett, 131.

5 Ann Cvetkovich, *Mixed Feelings*, 115−16.

Works Cited

Cvetkovich, Ann, *Mixed Feelings: Feminism, Mass Culture, and Victorian Sensationalism*. Rutgers U.P., 1992.

松本三枝子「*Lady Audley's Secret* における二重人格を再考する」『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編) 第35号、2003.

Maunder, Andrew (ed.), *East Lynne: Ellen Wood*. Broadview Press, 2000.

Pykett, Lyn. *The 'Improper' Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. Routledge, 1992.